

# 考古学は栃木県からはじまった!?

ひかえおろー

水戸黄門こと徳川光圀が  
全国を旅したのは  
ドラマの中の世界

でも水戸藩領内は  
くまなく歩いてる

那須地域には9回来ています  
そこで倒れている石碑の話  
聞くと、元にもどして書かれ  
ている内容を調べました。

元禄4年(1691)

侍塚古墳を発掘し、石  
碑に書かれている人物  
の墓なのか調べました。

御老公より  
お堂を建て  
て国造碑を  
大切に守る  
ようにとの  
命でいっせ  
い

もっ、いいでしょう

最後に、出  
土品を記録  
し、箱に収  
めて埋め戻  
しました。塚  
が崩れない  
ように松の  
木を植えま  
した。

これが日本で最  
初の発掘調査  
と保存活動です

それから七七年…

文化五年(二七六八)  
宇都宮に蒲生君平が生まれます

勉強して立派な人になる!  
そう、光圀公の『大日本  
史』で足りない部分を自分  
で調べて本にしよう

関西で山陵と呼ばれた天皇のお  
墓を調査して『山陵志』(志は誌  
と同じ意味)を完成させました。

この形をなんと呼べば良いのかな  
どうして、この形なんだろう?

前方後円墳  
発掘調査と  
遺跡の保存

両方とも、栃木から  
はじまったんだね!

栃木ってスゲー

古い本には、中国の皇帝が死ぬと、  
お墓まで特別な「宮車」という車  
にのせて運ばれるそうさ

車を引く四角い部分と、皇帝を乗せ  
る台の円い部分が山陵の形に似てい  
るゾ

宮車の形を真似したんだったら、前  
が四角いほうで、後が円いほうだか  
ら「前方後円墳」と名付けよう

埋蔵文化財センターの見学・体験学習・職場体  
験等のお申し込みは、  
ホームページ <http://www.maibun.or.jp>  
をご覧のうえ普及資料課まで  
月～金 TEL 0285-43-1971 (直通)  
日曜日 TEL 0285-44-8441 (代表)

編集後記

発掘調査では「何でここから、これ  
が出てくるの?」ということが結構あ  
ります。人の営みは不思議がいっぱい。  
詳しく見るとみんな違うから、調べて  
人間についてを考えることが必要で  
す。歴史学は「未来学」です。(しのゆ)

# 栃木県埋蔵文化財 センターだより

## CONTENTS

- 埋蔵文化財センターが実施した発掘調査から  
仏像が見つかった「くるま橋遺跡」
- みんなの近くに古墳はあるよ
- モノは「ギョウギョウ」、パネルは「ベタベタ」
- 常設展示室から
- まいぶん専門職員の いま気になるモノ
- 考古学は栃木県からはじまった!?

2018  
3月

発行 平成 30年 3月 3日  
栃木県教育委員会  
宇都宮市鳩田 1-1-20  
電話 028-623-3425  
編集 (公財)とちぎ未来づくり財団  
埋蔵文化財センター  
下野市業 4 7 4  
TEL 0285-44-8441 (日曜日) (代表)  
0285-43-1971 (月～金) (資料普及課)  
FAX 0285-43-1972  
URL <http://www.maibun.or.jp>



とちぎ発掘イッペン図鑑

土の中から顕れた  
平安時代の仏さま

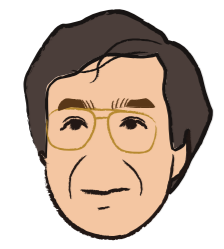


くるま橋遺跡(真岡市)の11世紀の住居跡から出土した阿弥陀如来座像です。  
光背や台座は失われていました。仏像の原型からつくった型に銅を流し込む铸造  
で、表面にウルシを塗り、金箔を押して仕上げています。螺髪や衣のシャープさか  
ら、高い技術を持つ仏師の作であることが分かります。(実際の大きさは8.9cm)

台座

実物大

# 仏像が見つかった「くるま橋遺跡」(真岡市石島)



中村享史【調査課副主幹】

専門：古墳の石室構造  
クラシックが大好きでかなり詳しいなど、多彩な趣味を持つ。

くるま橋遺跡担当の中村です。遺跡についてご紹介します。

くるま橋遺跡は、真岡市石島(旧二宮町石島)の南北に長い台地の上にあり、東側には五行川が流れています。埋蔵文化財センターでは、平成21・25年に一部を調査し、今回、十二所神社の南側を通る県道を拡張するため、つづきの部分を調査したところ、古墳時代から平安時代の家のあとをたくさん見つけました。



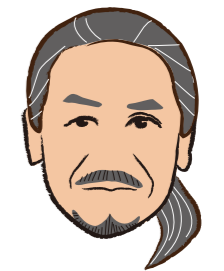
今から約1,400年前の古墳時代の家のあと(竪穴住居跡)は大型なのが特徴で、たくさんの土器が出土しました、なかでも朝鮮半島で多く使われた蒸し器(甑)の一部(把手)は珍しいものです。今から約1,300年前からはじまる奈良時代では、古墳時代より標準サイズが小さくなった竪穴住居跡を多数見つけました。家の中から出土した須恵器(登り窯で焼かれた青っぽい灰色の素焼き土器)は、益子や茨城県の新治で焼かれたものが混じっていることから、地域を越えた流通がわかります。約1,200年前からはじまる平安時代にも竪穴住居跡が見つかり、ムラが200~300年続いていたことがわかりました。

今回の調査でびっくりする出土品がありました。それは、平安時代の仏像です。竪穴住居跡から見つかったもので、この住居跡にはカマドや柱がなく、そこからは、11世紀の土器が出土しています。仏像は阿弥陀如来坐像です。型に銅を流して作られたもので、表面には金が貼られています。光背や台座は失われ、高さは8.9cmと小さいですが、かなり精巧に作られています。地元ではなく、都のあった畿内で作られた可能性があります。

こんにちは、車塚です。埋蔵文化財センターでは、保存処理といって、出土品を調べて直したり、これ以上こわれないように安定させて、次の時代に引き継ぐための仕事もしています。そのため、色々な機器があります。仏像は土の中から出てきたため、まわりには土がかたくくっついていました。今回は、仏像に傷をつけないように、拡大鏡や実体顕微鏡を使いながら、丁寧に土を落とすことにしました。



くるま橋遺跡 調査区遠景(北西上空から)



車塚哲久【資料普及課副主幹】

専門：文化財の保存処理  
石造物では県外の保存処理にも携わり国際発表もした県内第一人者。國學院短期大学非常勤講師。

この仏像は、重さや底部から型に銅を流して作る鑄造という技術で作られていることがわかりました。土を落としてクリーニングしていくと、着ている衣の細かい表現や、頭の髪の毛に当たる螺髪まで、とてもシャープに表現されていて、優れた技術で作られていることがわかりました。通常、金色をした銅製の仏像を金銅仏といい、銅の上に金メッキをしたものですが、さらに調査を進めると、表面に黒いウルシを塗り、金箔を押して仕上げていることもわかりました。木彫仏と同じようにウルシの上に金箔を押す作り方で、鑄造仏では奈良時代(8世紀)には既にこの方法が用いられていたそうです。

背中には金箔が押されていないので、光背があったものとみられます。また、蓮の花を表現した台座の上に座っていたと考えられます。

10世紀は京都の醍醐寺や室生寺、11世紀は京都平等院の仏像などが作られた時期です。この仏像は、小さいながらも、歴史的にも仏像美術的にも、文字どおり輝く存在ですね。

◀ 仏像出土状況(北から見る)

▼ 竪穴住居跡(SI-01を南から見る 3カ所ほど床面が赤く焼けた所があります)



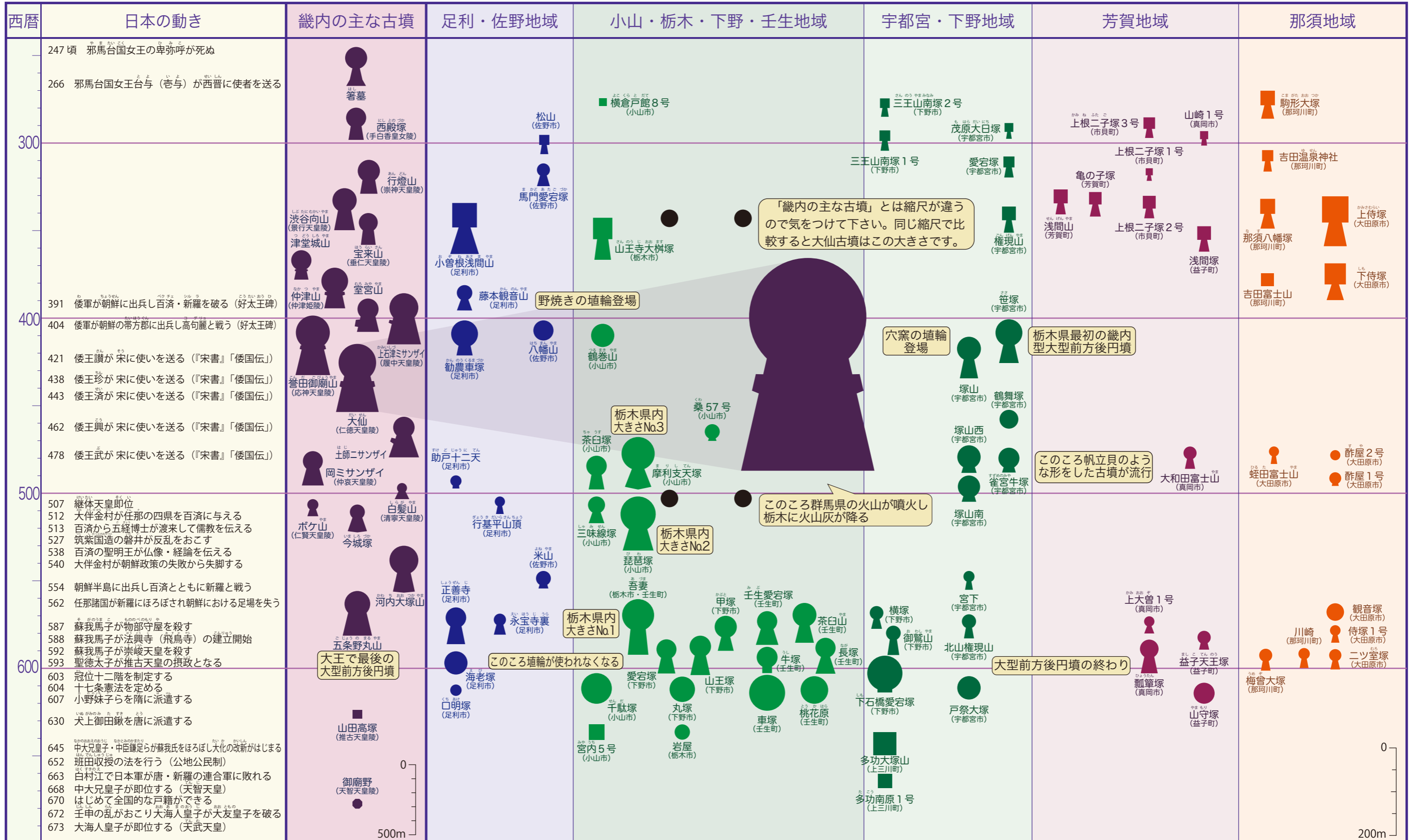
土のついた出土状態から

クリーニング終了

BEFORE AFTER

# みんなの近くに古墳はあるよ

古墳は、日本の動きや畿内の主な古墳と関係があります。これは、大王と地方の豪族がつながっているからです。ここで取り上げたのは代表的な古墳で、そのほかにも、たくさん古墳があります。住んでいる地域の古墳を探してみましょう。



(4) ※古代史サマーセミナー事務局・栃木県考古学会 1986 「第14回 古代史サマーセミナー栃木」、大橋泰夫ほか 1995 『全国古墳編年集成』 雄山閣をベースに近年の研究動向を参考に作成しました。なお、多くの古墳は発掘調査がされていないため、大きさや時期は不確定で、研究者によって諸説あります。

# 常設展示室から

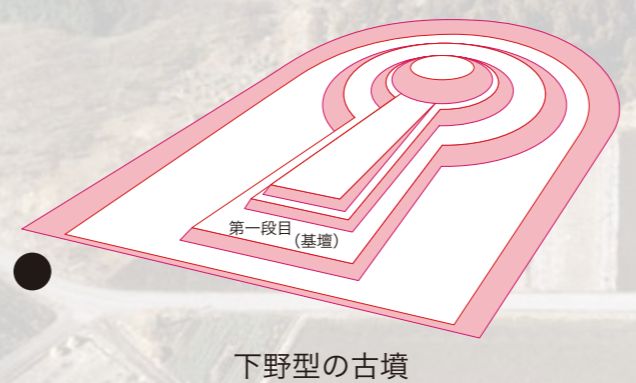
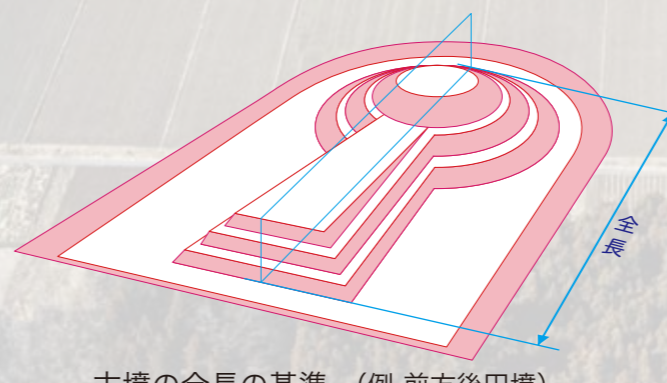
ねえ、みんな！琵琶塚古墳の大きさ、知ってる？

「…一三三三三三」 「…四四四四四四」

ちなみに古墳の長さのはかり方知ってる？

「…端から端まで」 「…土を盛った部分」

それでは、お答えしましょう。古墳本体(墳丘)の中心線上にある墳丘端の傾斜(墳裾)が終わるところを結んだ長さを全長としています。そこで、問題となるのが、下野型と呼ばれる第一段面(基壇)を広くとる古墳です。実際に土を盛った部分は少なくなるので、全国的に比較する場合、注意が必要です。



進藤敏雄【資料普及課副主幹兼課長】

専門：古墳 特に群集墳と社会構造  
実験考古学から陶芸の道に入り、  
自宅にロクロ・窯を持つ。陶芸展  
に応募するなど幅広く活動する。

## まいぶん専門職員のいま気になるモノ

進藤さん、最近気になっているモノってありますか？

やはり、相も変わらず「群集墳」です。現在、整理中の西高橋遺跡(小山市)の密集具合はスゴイですね。

そう、まるで花見の席取りシートの端が、次々重なるように、ところせましと造られていますね。

逆に、あの尋常ではない状態から、何か読み取れることはありますか？

古墳時代人の墓造りへの情熱が伝わってくるようです。群集墳には、これまでは一定の墓地の中に、小さい古墳が詰め込まれている印象がありました。でもひよっとすると、発想は逆で、敬う先祖の墓に少しも近づきたくて、自然と古墳の押しくらまんじゅうになったのかも知れませんね。

『古事記』・『日本書紀』には祖神と書かれて、祖先の霊を神と敬っていますね。

現在では海洋散骨葬に関心が集まるなど、墓に対する考えが変わりつつあります。古

墳時代人と今の日本人とでは、感覚も随分と違ってきているのでしょうか。

そういえば、シンメトリーの感性も薄いのでは。

古墳時代人が、まさか3:4:5で直角になることを知らなかったとは思えませんが、豪族居館のプランが平行四辺形だったり、結構アバウトな印象を受けます。もっとも、前方後円墳などは、はじめから直角をもとにした設計にはなっていないと考えていますが…。日本人が左右対称や直角を気にし出すのは、飛鳥時代以降、中国式の役所や寺院を建てるようになったからだと思います。

そうした、対象となる時代の考え方をベースにして、研究を進めていかななくてはなりませんね。

古墳時代人のように、おらかな気持ちで取り組んだほうが、当時の核心に迫れるかもしれませぬ(笑)。

※まいぶん＝埋蔵文化財の省略語「埋文」  
常設展示室から/コラム (7)

## モノは“ぎゅうぎゅう”、パネルは“ベタベタ”

—センター展示室へのお誘い—

栃木県埋蔵文化財センター 副所長 藤田典夫



当センターの前身組織である栃木県文化振興事業団の第1期生。栃木県立しもつけ風土記の丘資料館館長を経て現職。論文発表は言うに及ばず、県内市町村誌の執筆も多数。本県の弥生時代研究を牽引する第一人者。

埋蔵文化財センター(以下、センター)では、平成27年度から、出土品を使って栃木県の歴史を理解していただくよう、普及部門の充実化を始めています。その情報発信の場のひとつが展示室です。

これから見学される皆さんには、展示室に入ったら、まず遠くからぐるっとながめてみることをお勧めします。全体の構成はどのようになっているか、センターがどんな意図で展示をし、何を皆さんに伝えたいのかがわってくるでしょう。

展示室には完形のものや破損品など出土品がたくさん並んでいますね。石器や土器などの道具は、時代の流れによって文様や形もさまざまに変化するので、それをできるだけ多く見てもらいたいからです。展示品のひとつひとつに、見てほしい理由があるのです。また、解説のパネルやプレートは、各時代の基礎的な知識や、モノの名前・使い方などを記してあり

ます。パネルを何十枚と使うのは、皆さんに「へえ〜」「なるほど」と思っただけようサポートしたいからです。

わかりやすい展示・解説を、と心がけてはいますが、いかがだったでしょう。モノが見ずらかったり、文字が小さい、あるいは、専門用語を並べたて、独りよがりのパネルになっていないでしょうか。それを判定するのは皆さんです。多くの方々から忌憚のないご意見・ご指摘をいただき、よりよい展示を目指していく。つまり、センターの展示室は利用者である皆さんとともに作り育てていく、そうありたいと願っています。



(6) モノは“ぎゅうぎゅう”、パネルは“ベタベタ”